式　辞

冬を惜しむように 寒さが残りつつも　海峡を渡る風 日一日と和らぎ
旅立ちの季節を迎え　生命の息吹を強く感じる 今日の佳き日。

大間町長 野崎 尚文 様、風間浦村長 冨岡 宏 様、佐井村長 樋口 秀視 様をはじめ、多くのご来賓の皆様のご臨席を賜り、第四十六回 青森県立 大間高等学校卒業証書授与式をかくも盛大に挙行できますことに深く感謝申し上げます。

保護者の皆様におかれましては、逞しく成長されたお子様の姿に感慨も一入のことと思います。子育てにかぎりませんが、あれが最後の日だったのかと思うことが、振り返ると多々あるものです。抱っこしてあげたこと。絵本を読みきかせてあげたこと。弁当をもたせたこと。子どもたちは、高校生として、本日最後の日を迎えました。心よりお祝いを申し上げます。

さて、卒業証書を授与された四十三名の生徒諸君。卒業おめでとう。卒業にあたり、私から皆さんに三つのお願いをします。

一つ目は、なぜ学ぶのかについて考え続けてほしいということです。

新型コロナウイルス感染症は、全世界に大きな混乱をもたらすとともに、私たちに多くのことを教えてくれています。買い占め、転売、うそやデマなどの拡散。感染者やその家族に対する誹謗中傷など、人間の持つ醜さや愚かさを浮き彫りにしました。その一方で、今この瞬間にも命を守るために、地域や家族の生活のために懸命に行動する人々もいます。東日本大震災の例を挙げるまでもなく、人は、人を傷つける一方で、助け合うこともできるのです。その違いはどこから生まれてくるのでしょうか。それは、正しい知識を求めて、正しく学ぶ努力をしているのか？そうではないのか？に他なりません。学期の節目ごとに、問うてきたのはこのことです。人間は、未完成で弱い動物です。先入観で人を差別したり、自分に無いものを持つ人を羨んだり、憎んだり、限りない欲望をもち、お金や物ばかりか、心までも自分のものにしようとしたり、うまくいかないことがあると、自分のことは省みず、社会や他人のせいにしたりする性質を生来もっています。だから、努力しなければならないのです。困難に立ち向かって皆が幸せに暮らす社会をつくるために、正しい知識を得て、正しく行動する努力をしていかななければならないのです。それが、なぜ、学ばなければならないのかに対する一つの答えでもあります。

二つ目のお願いは、正しく人を頼る力（受援力）を身につけることです。

青年期にある皆さんの中には、卒業とは、自由を求め、学校という仕組みや制度から、あるいは家族という枠組みから逃れる日であると強く思っている生徒もいるかと思います。しかし、皆さんは、今日を境に、自由の中で生きて行くことの難しさ、自由に生きることの不自由さや辛さを知ることになるでしょう。これは、誰もが必ず通る道です。卒業とは、この厳しい社会に飛び込む覚悟を問う日でもあるのです。そう遠くない日に、このことを思い知らされるでしょう。その時は、辛いと声にする勇気をもってください。この社会には、個人の努力で解決できない状況を打開する仕組みや制度が必ずどこかにあります。自分の頭の中で考えるだけではどうしようもないことが、人生には多々あるものなのです。このことをしっかり覚えておいてください。

三つ目。最後のお願いです。

この本州最北端で学んだ日々を忘れることなく、必ずやこの地に戻ってきてください。今朝もまた、いつものように津軽海峡を大きな貨物船が通り過ぎて行きました。校歌にもあるように、この海峡は、まさしく「世界を結ぶ極北の道」です。卒業を境に、この土地を出て行く生徒諸君は、ここを離れる前に、この景色を、目に、心に、しっかりと焼き付けて出て行ってください。そして、志を果たしに、いつの日かここに帰ってきてください。

ここに残る生徒諸君は、故郷を離れる仲間が、いつでも、臆せず、帰ることができるよう、高く明るく輝く灯台として、どんな風波にも負けずにこの地を守り続けてください。残る生徒、出て行く生徒、いずれにせよ、本日を境に、大間高校は、諸君の母校となります。どうか、本校で学んだことを誇りに、在校生はもちろん、この北通りの子どもたちの道標となるよう、それぞれの地で活躍されることを切に望みます。

最後になりますが、出会いは大きな奇跡です。皆さんとの奇跡的な出会いに、教職員一同を代表して感謝いたします。

三年間、私たちの生徒でいてくれてありがとうございました。

いつの日か、大きく成長した皆さんと再会できることを信じ、そして、四十三名の卒業生、一人ひとりの前途に幸多からんことを祈念し、式辞といたします。

令和三年三月一日

青森県立大間高等学校長　森田　勝博